

シノドス（世界代表司教会議）にむけて

③

信仰養成委員会

前回に引き続き、東京教区シノドス担当の小西神父さまに寄稿いただきました。

* * *

シノドス性について その二

瀬田教会主任司祭・小西広志神父

シノドス的な教会のあり方は、それぞれの小教区共同体、司教区、司教協議会で探求する必要があります。ですから、これといった正答があるわけではないでしょう。ただ、シノドスということばが持っている「共に歩む」という意味合いは保たれるべきです。そこで、今回は紙面をお借りして、シノドス的な教会を目指すためにこのような点に注意してみたらどうですかを三つの点からお話ししたいと思います。

シノドス的な教会とはこれまでの小教区共同体のあり方をガラリと変えるものではありません。むしろ小教区共同体のこれまでの歩みを振り返って、よ

いものを受け取りつつ、それをさらによいものとしていくことが求められていると思います。そのためには、**1. レガシー**（遺産）を認める、**2. 今の取り組み**に注目する、**3. 未来への展望**を作りあげるという取り組みが不可欠でしょう。

1. レガシーを受けとりつつ

個人的な体験を少し話させてください。教区シノドス担当者を昨年に拝命されて、これまでの東京教区の歩みを分ける範囲で振り返ってみました。そこで気がつかされたのは1970年代の東京教区の司祭たちのめざましい活躍です。第二バチカン公会議で示された神の民の教会をなんとか実現させていきたいという意気込みです。おそらく松原教会に関わった神父さま方もそのような思いだったことでしょう。80年代以降はどの小教区共同体にもいろいろな活動が生じていった点は見逃ごせません。そういった取り組みが今の松原教会を作りあげています。歴代の主任神父さま、そして信仰の先輩方の不断の努力を無にするような形で「シノドス的」教会をつくりあげていく

ことは避けなければならないと考えます。だからといって年長者が「オレたちのときはこうだった、わたしたちのときはこうだった」と幅を効かすのも避けなければいけません。

2. 今の取り組み

新型コロナウイルス感染症の蔓延に対する小教区共同体の対応はいかがでしたでしょうか。ありがたいことに教会がクラスターとなることはありませんでした。いわゆるコロナ禍にあっても小教区共同体を維持し、守る務めを司祭も信徒も果たしてきたと思います。この働きは、多くの人々の犠牲の上に成り立っています。「集い」がない、あるいは「集え」ないという不自由さを抱えながらも、それぞれの小教区共同体はキリストの兄弟姉妹のために、近隣に住む人々のために、関わりをつくろうと努めています。

取り組みの数々は、その小教区共同体がおかれた状況を反映しています。司祭と信徒が生きている状況に応じての共同体づくりがなされているように思います。これを「シノドス的」教会の始まりと考え

てもよいのではないでしょう。「コロナだ
ったけど、がんばっているよね」と、現
状を肯定的にとらえて分かちあえるよう
になりたいものです。

ω. 未来への展望

繰り返しますが「共に歩む」教会の姿
が「シノドス的」教会です。未来への展
望の一端はすでに「東京教区宣教司牧方
針」に盛り込まれています。宣教する共
同体、交わりの共同体、すべてのいのち
を大切にする共同体を目指すのです。コ
ロナ禍はこれからも続くでしょう。コロ
ナ禍によって一度壊れてしまった人間関
係、信頼関係を再構築するのは難しいで
す。日本の社会の混迷はさらに進むと想
像されます。そのような状況にあって小
教区共同体が、つまり松原教会が「共に
歩む」姿を示すことは、いわゆる社会の
福音化へとつながるよい証しになると考
えます。

* * * * *